



第189回定期演奏会

一般発売3/30[会員先行3/29.30]

2022年5月20日(金) 17:45開場 18:45開演
三井住友海上しらかわホール
指揮/角田鋼亮(当団常任指揮者)
ヴォーン=ウィリアムズ: 音楽へのセレナード
ブルックナー: 交響曲第5番 [原典版]

©Hikaru Hoshi

シーズン最終回となる本日の定期に続いて……新たなシーズンの幕開けとなる次回定期(5月20日)でも、我らが常任指揮者・角田鋼亮がさっそく目を見張るようなプログラムと共に登場です。

マエストロ角田いわく、新シーズンのテーマは〈歌〉。——ひとの感情を声にのせて、相手の心を強く揺さぶる歌の力……恋の歌、子守歌、祈りを捧げる歌、働く者の歌、革命の歌など、音楽の芯であり根源のひとつでもある〈歌〉は、オーケストラ音楽にもさまざまな形で溶けこんでいます。新シーズンは全7公演を通して、傑作たちにあふれる〈歌〉のさまざま、その多彩さと豊かさをたっぷりお楽しみいただけます。ぜひ、この旅をご一緒に。

◆〈歌〉の澄んだ深みへ——ヴォーン=ウィリアムズ《音楽へのセレナード》

さて、新たな旅の始まりとなる次回定期は、いきなり(まず他では聴けない!)貴重な組み合わせです。

心にしみる美しいメロディで愛される、英国の作曲家ヴォーン=ウィリアムズと、ホールを大聖堂に変えてしまうようなスケール大きいサウンドを生み出したドイツの作曲家ブルックナー。あまりに作風が異なるので、ふつう並ぶことのない二人です。しかし(だからこそ!)並べてお聴きいただくなら〈歌〉の力がより強く感じられることでしょう。

まずは、レイフ・ヴォーン=ウィリアムズ(1872~1958)の《音楽へのセレナード》。英国音楽を愛する熱心なファンにとっては、特に忘れがたい逸品です。

ヴォーン=ウィリアムズ(が姓)は、20世紀前半のイギリス音楽を代表する作曲家。吹奏楽で大人気の《イギリス民謡組曲》や、オーケストラ曲でも《グリーンズリーヴスによる幻想曲》など、ときに民謡の美しさを深く愛おしむような芸術的で親しみやすい彼の作品は、初めてのかたでも心惹かれるでしょうし、9つの素晴らしい交響曲は詩情から感情の深淵まで幅広く、聴きこむにつれて深い傑作ぞろいです。

《音楽へのセレナード》(1938年)も、まさに〈歌〉の輝き——柔らかな光に包まれたような、繊細な美しさに満ちた絶品。甘やかに響く心地良い音楽……その歌の澄んだ深みへいざなわれるような、心うつ傑作なのです。

◆ひとの心に光を、人の世に音楽を……

今回はオーケストラ版でお聴きいただけますが、この曲、実はもともと、16人の独唱者(1)とオーケストラのための作品でした。英国の名指揮者サー・ヘンリー・ウッドの楽壇生活50周年を祝って作曲されたものです。

ウッドが「私への讃歌ではなく、ずっと歌われるような作品を書いてほしい」と願ったのに応えて、作曲家は、以前からぜひ音楽化したいと願っていた、シェイクスピア『ヴェニスの商人』から、終わり近い第5幕第1場を選んでテキストとし、祝賀にふさわしく(ウッドも作曲家も良く知る)当時の英国を代表するオールスター歌手16人を想定しながら《音楽へのセレナード》を作曲したのです。

もちろん大成功を収めたのですが、名歌手16人を揃える……というだけで再演は大変。そこで作られたオーケストラ版が、次回定期でお聴きいただくヴァージョンです。

原曲の歌詞となったシェイクスピアのテキストを、松岡和子さんの名訳(『シェイクスピア全集10 ヴェニスの商人』[ちくま文庫、2002年])から冒頭だけ引用させていただくと……「きれいだなあ、この堤で眠る月の光! / 僕らもここに坐って、忍び寄る楽の音(ね)に / 耳を澄ませよう。柔らかく夜をつつむ静けさは / 甘く快い調べに打ってつけだ」

……とはじまり、「音楽の妙なる力」や、人間にとっての音楽の力を美しく歌った一節が、声楽曲も得意としたヴォーン=ウィリアムズならではの〈歌〉に昇華されます。そしてそれは、オーケストラ編曲版でも(言葉がないからこそ、逆に音楽の力として!)細やかに光るのです。

初演の際、この《音楽へのセレナード》を客席で聴いたラフマニノフも、あまりの美しさに落涙したと伝えられていますが、この曲が書かれたのは、暗い時代でした。この年、ヴォーン=ウィリアムズがハンブルク大学からシェイクスピア賞を授与されるためドイツを訪れたときも、彼は既に(まもなく全欧を戦禍に叩き込む)ヒトラー時代のドイツに辟易としており、帰国後はナチスの迫害を逃れてきた亡命音楽家や難民たちの手助けをするのでした。

《音楽へのセレナード》でも引かれたシェイクスピアの言葉「美しい調べにも心を動かされない人間は / 謀反、陰謀、略奪にしか向いていない。 / そういふ人間の心の動きは闇夜のように鈍く、 / 感情はこの世と地獄の境のように暗い」(松岡和子訳)は、時代の背景をも反映しているでしょうし、言うまでもなく、いまこの時代にこそ、噛みしめ直されてほしい〈歌〉なのです。

◆〈歌〉と響きの大伽藍へ……ブルックナー: 交響曲第5番の宇宙

そんなヴォーン=ウィリアムズ、尊敬する作曲家にはブラームス(6月定期でお聴きいただけます)や同時代のシベリウス(来年1月の定期でお聴きいただけます)を挙げていましたが、次回定期で後半にお聴きいただくアントン=ブルックナー(1824~1896)に関しては、書簡に「初めて彼の交響曲[第7番]を聴いたとき、ワグナー=テューバ4本の響きが英国のグリー[無伴奏男声合唱曲]に聴こえた」くらいでまったくお呼びでない……と記している始末。なるほど対照的な作風ではありますが、それぞれ宗教音楽・合唱作品に力を入れたふたりの音楽を〈歌〉という切り口から捉えてみると、また違った視界がひらけてくるのではないのでしょうか。

幼い頃から修道院の少年聖歌隊で音楽への愛を深めたブルックナーは、やがて教会オルガニストとして活躍しながら作曲に勤しむようになって、大聖堂の壮麗なオルガンの響きをオーケストラ表現に投影せずにはいられませんでした。次回定期でお聴きいただく交響曲第5番(1878年)も、その典型。ブルックナーが遺した交響曲のなかでも、特に重厚な印象を与える傑作ですが、ヨーロッパの美しい城をも思わせるようなその構築美にも、人間の〈歌〉のさまざまが織り込まれ、聴くにつれて心を溶かしてくれるでしょう。

特にこの第5番では、教会音楽の〈コラール〉[ドイツの教会で会衆によって歌われた讃美歌で、やがて多くの声部をもつ芸術的な声楽曲、オルガン曲にも発展しました]が重要な役割を果たしています。荘厳な合唱を聖堂に満たすようなオーケストラの〈歌〉、はたまた緩徐楽章のはじめでオーボエ独奏が印象的に歌う、哀しく印象的な息長い〈歌〉……(当時のブルックナーが直面していた精神的な苦境を反映している、という説も)。さらには、田舎の素朴なレントラー舞曲のようなスケルツォ楽章で聴こえてくる、民謡風の〈歌〉……。この曲には、真摯で深刻な表情から、人間味のある表情まで、驚くほど多彩な顔をみせる〈歌〉が、深く織りこまれています。

ぜひこの曲を生演奏でお聴きいただきたい理由のひとつは、その最終楽章にもあります。先行する楽章のテーマが回帰して「おや?」と驚きを感じるだけでなく、オルガニスト=ブルックナーが得意としたフーガが、コラール主題を巧緻に組み合わせながら聴き手を惹き込み、やがて先行するさまざまな主題と新たな展開とが、巨大なスケールで組み上げられてゆくさま……時間の環が繋がれたところに大きな扉がひらくような、えもいわれぬ感動があるはずです。

そんな傑作を、室内楽的で緊密な表現も鍛えてきたセントラル愛知交響楽団ならではの音楽として、このホールで体感する。またとない経験となるでしょう。次回もぜひ、このホールでお会いいたしましょう!

やまのたけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。

Profile

